

# 先天性の盲聾児に対する点字や指文字による 言語教育の可能性

柴田 保之

## 【要旨】

わが国の盲聾児の教育は、昭和20年代から30年代にかけて山梨県立盲学校において取り組まれた教育が始まりであり、その影響のもとにその後の実践は取り組まれてきた。しかし、盲聾児の教育はその実態把握からいまだ手探りの状況にあり、点字や指文字による言語の獲得は困難であるとの言説や知的障害の存在に言及する言説も存在する。しかし、筆者が関わった4人の先天性の盲聾児は、学習の停滞を経験しながらも、点字の学習が可能になり、そのうちの3人は言語の獲得にいたった。そして、そのいずれの実践にも、いったんは陥った停滞を打ち破って言語の学習へと飛躍するプロセスが存在していた。本稿では、その4人の盲聾児に対する実践の記録をもとに、そうした飛躍がどのようにしてもたらされ、その後の言語獲得の学習へと発展することができたのかということに焦点をあて、検討をくわえた。

## 【キーワード】

盲聾児 先天性盲聾児 重複障害 梅津八三 中島昭美

## 1. 問題と目的

日本の盲聾二重障害に対する教育は昭和20年代後半から山梨県立盲学校での2名の盲聾児に対する教育に始まる。この教育を進めるにあたっては、東京大学の梅津八三（1906～1991）、中島昭美（1927～2000）らの力が大きかった。そして、その後の盲聾児の教育は、梅津と中島と、その両者に指導を受けた研究者や実践者によって引き継がれ、今日にいたっている。

梅津らの教育においては、最初のコミュニケーションは、身振りサインを用いるが、いわゆる言語の習得に際しては、点字を基礎にして、ローマ字式の指文字を用いるという方法がとられ（Umezu,1974；中島、1977）、その後も、この方法が継承されてきた。

しかし、盲聾児の状況は、先天性か後天性か、視力や聴力の障害の程度など、様々な要因に応じて異なっており、その状態像はきわめて多様になるため、上述した梅津らの盲聾教育の方法をすべての子どもにそのまま適用できるわけではない。

こうした盲聾児教育のわが国での取り組みを整理した菅井（2004）は、「点字や指文字、指文字などのコミュニケーション方法の利用が可能になった例については資料的にここ10年間にはあ